

I-1. 沖縄国際海洋博覧会 1975・海洋文化館とオセアニアの文化復興

国立民族学博物館長 須藤健一

(司会：後藤明南山大学教授)

それでは、まず最初のパネリストをご紹介しますと思います。

大阪の国立民族学博物館の館長であります須藤健一先生でございます。須藤先生は、元日本オセアニア学会の会長、あるいは日本文化人類学会の会長を歴任された日本を代表するオセアニア研究の研究者でございます。

先生は、東京都立大学の大学院時代、ちょうど 1975 年前後のこの沖縄国際海洋博覧会の際に、海洋文化パビリオンをつくるために、当時、須藤先生や同じ世代の研究者がたくさん太平洋各地に派遣されまして、今、皆さんがごらんになっているような資料の大部分を収集された時代がありました。その中心的な存在でありまして、それ以来、この海洋文化館について、大変温かく見守っていただいた先生でもございます。

須藤先生の経歴は、そこに書いてはございますが、国立民族学博物館で助手や助教授、神戸大学のほうでも教鞭をとられましたが、その後、国立民族学博物館に戻られまして、今は館長の要職につかれております。お忙しい中、今日海洋文化館のシンポジウムに来ていただきました。では、須藤先生、ご講演をお願いしたいと思います。

(須藤健一)

皆さん、こんにちは。ただいま紹介していただきました国立民族学博物館の須藤と申します。

海洋博公園の 40 周年記念おめでとうございます。私は 1975 年の 6 月から 9 月までこの海洋文化館で、60 名のコンパニオンの方たちが展示物の紹介と説明をできるように指導をしていました。つまり、彼女たちのインストラクターとして働いていました。その時の展示とくらべ、現在の海洋文化館の展示のすばらしさにあらためて感心しております。



I. 沖縄国際海洋博覧会の民族資料収集

海洋博当時の海洋文化館は、フラットな空間に展示ケースに入ったものと、ケース外のものという、2種類の展示しかありませんでした。先ほど花城理事長が話されましたが、後藤明さんを中心とした新しいアイデアで、海洋文化館が世界に誇れる海の博物館に生まれ変わったことを、非常にうれしく思います。

さて、私がこれからお話するのは、この海洋文化館の創設にともない、沖縄国際海洋博覧会が、そして私たちが何をなし、それが世界にどのようなインパクト、文化的・社会的な影響を与えたのか、そういうお話をさせていただきます。

本日のシンポジウムのテーマである「グレートジャーニー」は探検家関野吉晴さんが使った言葉ですが、まず、太平洋へ進出した人々の旅についてふれておきます。オーストラリア大陸には4万5,000年前に今のアボリジニの祖先になる人が移り住みました。その後、私たちと同じモンゴロイド（アジア）系の人々は5,000年前ぐらいに台湾を出て、東南アジア島嶼部を経てオセアニアに到達したと考えられます。その人々は、現在の台湾原住民族と同系の祖先だといわれておりますが、突然、ニューギニア島の北の島ビスマーク諸島などに今から3,300年前に現れます。その人々は、土器をつくり、家畜を飼い、タロやヤマやバナナなどの根栽植物を栽培するなどの新石器文化の技術と知識をもち、航海術を駆使して舟を操ることのできる人間集団でした。その後、太平洋の島々へ移住していったルートがこの図で明らかかと思えます。

地球上の最後の秘境であったアオテアロア（ニュージーランド）に人間が住み着いたのが今から750年前です。ハワイも今から1,000年前とか1,250年前にタヒチから人が移動したといわれています。それから、ラパ・ヌイ（イースター島）も今からおよそ1,000年前。ですから、人類が太平洋へ出て約2,000年のグレートジャーニーで人間が住める全ての島々に人が住み着いたということになります。

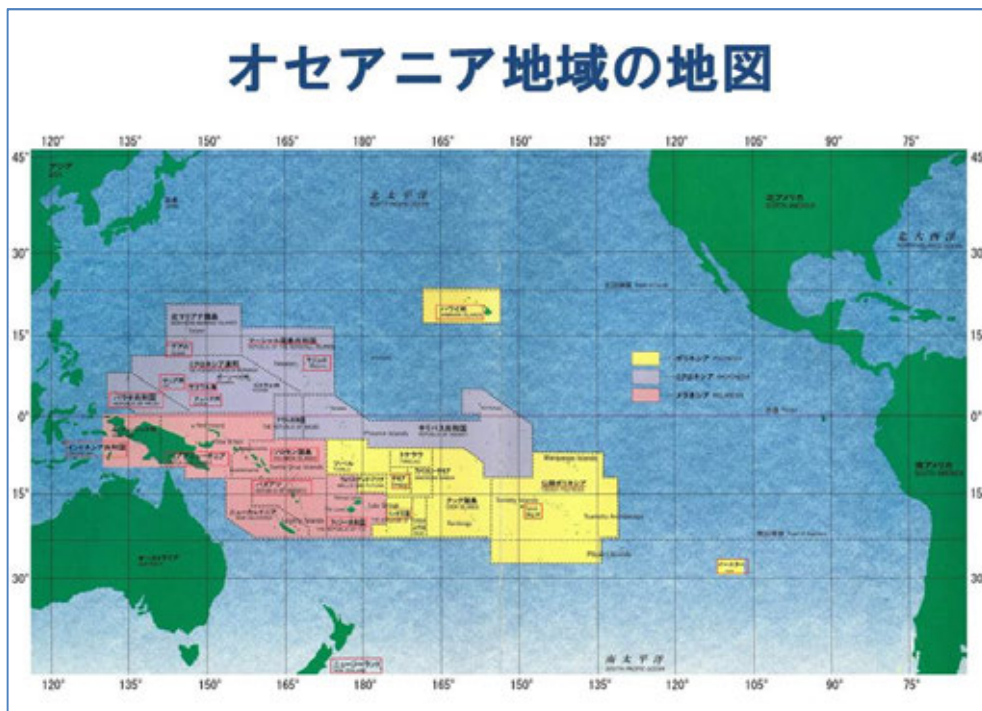


この海洋文化館は、一辺 114 メートル、幅 34 メートル、柱なし、窓なしという、当時世界で初めての巨大な建築物として有名でした。この広大な空間に何を展示するのかということで、2 つのグループが結成されました。1 つが定着収集班、もう一つが一般収集班です。定着収集班は、3 カ月ないし 4 カ月の調査をしながら、その調査地の人々がつくりだし、使っているものを収集することが任務でした。日常的な生活用具類が中心です。それは展示ケースの中に入るものが大半で、約 1,500 点収集されました。15 名の大学院生、私もその一人で、先ほど後藤さんから紹介がありましたけれども、海洋博覧会収集調査団というのをつくりました。

- 1 **収集調査団の結成、団長梅棹忠夫、民族学・人類学徒15名、1974年8月～12月現地調査に基づく「定着収集」、ケース内展示用約1500点。ポリネシア、ミクロネシア、メラネシア、インドネシア、マレーシア、フィリピンなどの衣食住の用具、漁具、装飾品、運搬具、仮面、神像、儀礼具等。**
- 2 **NAV(日本映像記録)のスタッフと協力者による「一般収集」、消えゆく大型造形物(カヌー、神像、家屋等)の収集、ケース外展示用約20点。収集品：①タヒチ：儀礼用カヌー、漁労用カヌー、②サモア：漁労用カヌー、③ハワイ：戦いの神・クー神像、④バヌアツ：漁労用カヌー、⑤ソロモン：戦闘用カヌー ⑥パプアニューギニア：クラカヌー、ラカトイ、小型カヌー、通信太鼓・ガラムト、精霊の舟、⑦パラオ：カヌー、⑧ガム：ラッテ、⑨インドネシア：ピス、船形屋根の家屋、⑩マレーシア：小型カヌー、棺、死者の舟、⑪フィリピン：家船、など**

20 点のカヌーや家屋など大きな民族資料は、日本映像記録 (NAV)、昔、「すばらしい世界旅行」という番組を日本テレビで放映していましたが、NAV のスタッフと協力者によって集められました。オセアニア研究者、あるいはプロといわれる現地を知っている方に NAV が依頼して集めたのです。それが一般収集班です。

図で太平洋の赤い枠で囲っている地域に調査団が出かけて収集しております。ほとんどのところへ行っているといえるでしょう。フィジー、トンガとニューカレドニアには行っていませんけれど。地図の紫色がミクロネシアです。その南、ピンクがメラネシア、東の黄色がポリネシアで、現在、オセアニアには 14 の国と 10 近い地域があります。



先端に突起をつけた櫂づくり



搗いたパンノキ
の実(パンモチ)
を入れる木鉢



儀礼用木鉢

ポリネシアの神像 メラネシアの楽器



オセアニアの漁具



私が行ったのはトラック、今はチュークとよばれている諸島です。その北西離島のウルル島で、その当時大型帆走カヌーや手漕ぎカヌーで漁労活動をしていました。まず、カヌーのパドル、櫂（かい）をつくってもらいました。櫂を皆さん手にしてごらんください。櫂の先にとんがったものがついています。これはクルップ（小さいココヤシの実）とよばれ、櫂を漕ぐときの力がまっすぐ伝わり、潮をかきやすくなるといわれます。小さなことですが、彼らは櫂の先にとんがったものをつけてカヌーの速度を上げる工夫をしております。これが櫂の製作の写真です。

トラックでは、ウーノンとよばれる木鉢を、パンノキをくり抜いてつくります。儀礼のときにはこの中に「パンモチ（パンノキの実の餅）」を入れて神に献上します。パンノキは日本にはないですが、パンノキの実の実物は写真のようなものです。でんぷん質のこの実の皮をむいて煮て、石杵で厚板の上でつくると餅になります。これを島の人々は「パンモチ」とよんでいます。写真は首長が神にその年の豊作のお礼を言っているところです。この儀礼用の木鉢を新たに集めてもらい収集しました。こういう小物を私たちが集めました。

そのほかにもスライドのような神像が集められました。ラパ・ヌイ（イースター島）の神々と鳥人像です。ニューギニアのガラムトという割れ目太鼓も収集されました。そのほかに踊り棒とか両端にトカゲの皮をはった太鼓ですね。

漁具も集めました。左上の手網は女性が両手にもって輪になって魚を追い込むすくい網です。その下はソロモン諸島などでサメをおびき寄せるガラガラです。水中で動かすと小魚が群れる状態になります。一番下は、魚を釣り上げる凧で、凧から水面に釣り糸を垂らしてダツやサヨリを釣ります。右側は、釜（うけ）とトビウオをとらえるココヤシ殻の浮きです。下は、細長く切ってマグロやカツオを釣る擬餌針をつくるクロチョウガイです。この貝の光沢が水中で小魚が群れて光る色と同調して餌に見えます。

クックが見たタヒチの戦闘カヌー (18世紀末)



W.Hodges 1777(R.Joppin and B.Smith 1985)

大物は現在入り口に展示してあるタヒチのカヌーなどです。あれは、キャプテン・クックが1768年～69年にタヒチに航海したとき、パペーテのマタヴァイ湾に浮かんでいたカヌーを画家が描いた絵に基づいて復元したものです。これは帆をかけていません。戦闘用カヌーです。クラ・カヌーもあります。これは、ニューギニア島の東北部にあるトロブリアンド諸島などで、島と島との間で貝製の装飾品や財宝を交換するための航海用カヌーです。

貝の財宝交換の航海用クラ・カヌー (トロブリアンド諸島、1970年代)



Mahnic.J.,1998

ラカトイとよばれる大きな筏（いかだ）は、パプア湾のポートモレスビーの近くに住むモツ族が、くり抜いた複数の船体に横木を渡してつないだ大きな乗り物です。モツ族は土器づくりに長けた人たちですが食料がないので、土器をたくさんラカトイに積み込んで、対岸のヒリ地方へ行って、向こうが持っているタロイモやサゴヤシなどの食べ物と交換して持ち帰ります。展示してあるにはその復元です。

パプア湾のラカトイ



インドネシアのスラウェシの山奥に住んでいるトラジャ族の家も集めました。海と関係ないと思いますが、その家の屋根は舟の形をしており、自分たちの祖先は海から来たという神話を伝えています。これは現在、海洋文化館には展示していないようですが。

トラジャの舟形屋根 (民博)



アスマットのビス (トロップン博物館、2012年)



高い人像はビスといいまして、インドネシア領ニューギニアのアスマット地方で男性が死ぬと建てる柱です。死んだ原因は、誰かに呪術をかけられた、あるいは戦争によって負けたからと考えられており、仕返しをしなければいけない。その仕返しを終えるまではこの人像を記憶として墓地に立てておくのです。1960年代にその慣習はなくなりましたが、マングローブの一木をくり抜くビス・ポールは現在でも美術品として制作され、世界市場に流通しているようです。こういう大きなものが「一般収集」として集められました。

II. 海洋文化館のしかけた文化復興

次に 1975 年に沖縄で海洋博が開催され、海洋文化館ができたころから、オセアニア地域でさかんになった「海人（うみんちゅ）の伝統」、つまり海洋文化を復興させようという運動についてみることにしましょう。具体的には伝統航海術の復元や大型カヌーの建造、ことばや伝統舞踊の復興などです。当時、ミクロネシアの一部の島を除くと太平洋から伝統航海術と大型カヌー建造の知識と技術は消え失せていました。



現在の海洋文化館に展示されている外洋帆走カヌーを建造したポロワットとその西 250 キロにあるサタワルという、2 つの島には当時、十数名の航海師がいました。1970 年にサタワルの航海術師、ルイス・ルッパンリックさんは、ドイツ時代から 70 年も絶えていたサイパンへの往復航海を復活させました。サイパンはサタワルから北 800 キロにあり、カヌーで 10 日間の航海で行けます。19 世紀にサタワルが台風で襲われて島の半分の人々がサイパン（サタワル語で「無人の島」の意味）に移住し、今なおカリリニアンとよばれて多くの方が住んでいます。

II. 海洋文化館のしかけた文化復興

オセアニアの海洋文化復興の兆し

- 1 ポリネシアとメラネシアからの伝統航海術の消滅、ミクロネシア・サタワル島とプルワット島の航海師による外洋航海が注目
1970年 サタワルーサイパン800Kmの航海の復活
2. ハワイの研究者らによる古代ポリネシアのカヌー復元
1973年「ポリネシア航海協会」設立
1975年ホクレア号、タヒチの儀礼用カヌー（海洋文化館展示用）
1979年フアヒネ島でポリネシアの古代カヌー発掘（ビショップ博物館）
- 3 太平洋芸術祭の伝統カヌーと航海術の重視
1972年太平洋芸術祭スタート（第1回はフィジー、4年ごと開催）
1980年ポートポレスビーの芸術祭で伝統カヌーの競争
1992年クック諸島の芸術祭でカヌー・ページェント
各国・地域は古代カヌーを復元・建造して参加、開催地へ
カヌーで集結・カヌーセッションが慣例化（カヌー・ルネサンス）

一方、ハワイでは、ポリネシア航海協会が結成され、1975年にホクレア号というカヌーを復元してタヒチまで航海するという壮大な計画がもちあがりました。タヒチは、ハワイ人の祖先が1000年前にやってきた故郷です。そして、1974年ころ、NAVは、海洋文化館にタヒチの儀礼用カヌーを展示するために、ハーブ・カネさんというハワイ人の芸術家に頼んでその大きなカヌーをタヒチで造ってもらいました。カネさんはほぼ同じ時期に「ホクレア号」の建造にも関わりました。

それから、1979年、ファヒネというタヒチの北にある島で、偶然ダブル・カヌーの7メートルもの舷側板とマストなどが発掘されました。舷側板は、カヌー船体の横板で、今から1200年前のものと測定されています。これを発掘したのが、ハワイのビショップ博物館の篠遠喜彦博士です。今から1,200年前の時代に、ちょうどタヒチからハワイ、タヒチからラバ・ヌイへ人々が移住していたころに、その舷側板を持つカヌーが使われていたということがわかります。したがって、当時のポリネシアの人々は、ホクレア号タイプのカヌーで、数千キロに及ぶ島々の移住や交易をおこなっていたことがうかがえます。

もう一つは、1972年から太平洋の14の国と地域が、自分たちの失われた伝統文化を復興するために、「太平洋芸術祭」をはじめます。この芸術祭は、踊り、先ほど沖縄のフラダンスグループが演じてくださいましたハワイのフラダンス、舞踏や歌、絵や仮面や彫像づくりの芸術など、国や民族が伝えてきた固有の文化をもち寄って4年に一度開催します。お国自慢とおらさ民族の自慢をしながら太平洋全体で、自分たちの文化に対する誇りと威厳を見直し、伝統文化への自信をとり戻すことが主な目的です。

1975年に復元されたダブルカヌー



なかでも1992年に、クック諸島で開催された第6回太平洋芸術祭では、参加国は必ず自分の島の伝統カヌーを復元し、それを航海して芸術祭に参加するというカヌーページェントがおこなわれました。かなりの国がカヌーで太平洋芸術祭に集まりました。これがハワイからのホクレア号ですね。

再建されたダブル・カヌー
(クック諸島、1992年)



写真はクックのラロトンガ島で復元された大きなダブル・カヌー。陸上で造って、今、海へ運んでいくところです。このように伝統的な大型カヌーを再建造するという運動、カヌー・ルネッサンスがポリネシアでさかんになってきます。その後も4年おきですが、この芸術祭にはカヌーが集まります。今年(2016年)の5月～6月にグアムで第12回太平洋芸術祭が開催されました。グアムにポロワットやサタワルなどからカヌーが船団を組んで来ております。この芸術祭が太平洋の人々の伝統文化の再認識に非常に大きな役割を果たしています。

Ⅲ. サタワルの航海師の偉業

この写真は、ポロワットと同じタイプのサタワルの外洋航海用カヌーです。私もサタワルで1978年から1981年にかけて2度、延べ15カ月間、調査をしましたので、航海術の習い事をしました。サタワルではこのカヌーがないと食料、特に動物性タンパク（魚やウミガメ）を海から獲得できませんので、大型帆走カヌーを建造し使っています。当時、500トンの大きな連絡船がヤップから2〜3カ月に一度来航していましたが、それに頼らずに、自分たちで無人島での漁撈活動やほかの島にいる一族や親族と交流し、また交易するための航海の必要上、こういう大型カヌーと航海術をずっと受け継いできたといえます。先ほど言いましたけれども、ミクロネシアのポロワットとサタワルという島は、カヌーとか航海術に関する文化的・社会的影響を太平洋の人々に与えています。それについて話します。

チェチェメ二号というカヌーが1975年12月にこの海洋博の会場にサタワルから約3,000キロの航海をなしとげてやってきました。その航海を指揮したのがサイパンへの海の道を拓いたルッパンリックさんという航海術師と5人の航海師たちです。この航海の成功によって、サタワルの航海術の正統性と優秀さが世界的に注目されました。太平洋からは消滅したと思われていた伝統航海術が生きているのだということで。今日参加しておられる門田修さんもこのチェチェメ二号の海洋博会場への航海には、たしか伴走船でずっとサポートしてくれたと聞いております。それから、ルッパンさんは、1989年の福岡アジア太平洋博覧会の前年のプレイベントにもう一度日本へ航海して来ております。



サタワルやポロワットでは、優秀な航海師を育て次世代に航海術を継承させるための「国家試験」に相当する「ポ」の儀礼、つまり伝統航海術修得儀礼がおこなわれていました。男性が父や母方オジからの個人的な航海術伝授を20年余りうけた後、20歳後半にポの洗礼をうけます。その儀礼は、カヌー小屋において多くの長老航海術師から島の人びとが見守るなか、4日4晩、不眠不休で航海術の知識を詰問される試験です。

しかし、サタワルでは、1953年のキリスト教への集団改宗でその儀礼は廃止されました。ところが、1997年にポロワット島の北のプンナップ島で、サタワルの航海術師エペイマイさんの指導のもと、この「ポ」儀礼が復活しました。そして、2007年、ホクレア号が日本への航海の途上、サタワルへ寄って、マウ・ピアイルクさんにダブル・カヌーを贈りましたが、同時にピアイルクさんが「ポ」の儀礼を催し、ホクレアとサタワルの航海者11名に航海師の称号を授与しています。ホクレアの日本への航海については、同行された内田正洋さんがのちほど話してくれると思います。

ホクレア号は、1976年のアメリカ建国200年祭のハワイ州の記念事業としてハワイ人の故地、タヒチへ航海するために建造されました。その前年にホクレアは完成しましたが、それを動かす航海者が、ハワイにもポリネシアの島々にもいないことがわかりました。幸運にも、サタワルの航海術師、マウ・ピアイルクさんを探しあてて、ハワイに招聘しました。ハワイ人の長老は、小さなサタワルの航海師がホクレアを操れるわけがないと強く反対しました。しかし、ピアイルクさんの航海術の話とその経験の豊かさを知り、タヒチへの航海を頼みました。彼は航海師として1976年5月から33日間の航海でホクレアをタヒチに導きました。この航海は、ピアイルクさんがサタワルの航海術をベースにハワイ

Ⅲ. サタワルの航海師の偉業

- 1 チェチエメ二号の海洋博覧会場への航海
 - ① 1975年ルイス・ルッパンと5人の航海者が「新しい海を拓く」
 - ② サタワルの外洋カヌーとの海術の国際評価の高まり
 - ③ 1988年福岡アジア太平洋博覧会への協賛航海
 - ④ 1997年航海術修得儀礼Pulap島で復活、2007年Satawal島で
- 2 ホクレア号のタヒチとポリネシアの島々への実験航海
 - ① 1976年マウ・ピアイルクの指揮のもと15名のクルーがタヒチへ
 - ② 1978年からピアイルク弟子ナイノア・トンブソンへ本格的伝授
 - ③ 1980年ナイノアはタヒチへ(マウ同乗)、85年NZ、92年ラロトンガ、95年マルケサス(ハワイロア)、99年ラバヌイなどの往復実験航海を達成
- 3 サタワルの2人の偉大な航海師の功績
 - ① ルッパンは日本へ、ピアイルクはハワイからポリネシアの島々へ、未知の大海原を乗り切る航海をなしとげた
 - ② 2人の偉業は、サタワルの航海術がポリネシア航海に応用可能であることを実証した。オセアニアの伝統的航海術の知と技は基層で共通性を有する。

ルッパンの海洋博への航海に触発され、ピアイルクのハワイでの伝統航海術の伝授とワイ人航海者の育成により、オセアニアのカヌーと航海の文化復興が実現した

のビショップ博物館のプラネタリウムでハワイとタヒチの星・星座を学び、ハワイの天文現象や海象や気象などを観察して、ホクレアをタヒチへ連れていったのです。そのころまだハワイの人たちはピアイルクさんから航海術の伝授を受けていませんでした。

1979年9月からハワイの航海師志望の若者、ナイノア・トンプソンさんがピアイルクさんから本格的な航海術の伝授を受けはじめます。そのころ私はサタワルで調査をしていました。1979年7月下旬、ピアイルクさんがサイパンへの往復航海から帰ってきました。トンプソンさんは、1978年3月にタヒチへの二度目の航海を試みます。波浪注意報の出るなかの航海で、ホクレアはモロカイ島の海峡で転覆し、有能なサーファーがなくなりました。この事故の反響は大きく、ホクレアによる航海計画はとん挫してしまいました。

その1年後、トンプソンさんは正統な伝統航海術を学ぶ決心をして、サイパンにいたピアイルクさんに伝授を懇願しました。ピアイルクさんは即答しませんでした。サイパン滞在の予定を2カ月も早めてサタワルへ帰ることにしました。7月から9月は、北東貿易風が弱まり、台風が起きる時期でサタワルでは南北方向への航海を控えます。ピアイルクさんはハワイ行を考えて航海をしたのです。案の定、グアム島の南500キロ付近で嵐に見舞われ、5日間漂流する羽目になりました。サタワルへのみやげの米を10袋海に捨てたということです。サタワルから100キロ西のエラート環礁にたどり着き、サタワルへは10日遅れで帰ってきました。

ピアイルクさんは、1976年のハワイからタヒチへの航海では、「乗組員の行儀が悪くて、おれは嫌になってサタワルへ帰った。けれども、ハワイの若いやつがサイパンにやってきて航海術を教えてほしいと頼んだので、おれはこれからハワイへ行く」といって、1979年8月にサタワルを出ていきました。9月にハワイへ着いて、それからトンプソン家に住んで航海術を本格的に教えました。そして、1980年にトンプソンさんは、自分の力でハワイからホクレア号によるタヒチへの航海をなしとげました。その航海には、ピアイルクさんも同乗していましたが、ほとんど口を出さなかったそうです。これは、ピアイルクさんがハワイの優秀な若者に、失われて数百年たっているハワイの伝統航海術を授けたことを意味します。その後、トンプソンさんとハワイの若者はその航海術を駆使して、20年間にわたりホクレア号で実験航海をしました。祖先が2000年前にポリネシアの島々に移住したという伝承にしたがって、島から島へのすべてのルートの航海に成功し、祖先がなした航海が「事実」であることを証明しました。



これまでの話をまとめますと、ルッパンさんは日本へ3,000キロの荒海を越えた航海を達成させ、ピアイルクさんはハワイからタヒチへ赤道を越える4,000キロの大航海をしました。このサタワルの2人の航海術師が成し遂げた偉業は国際的に評価されました。この後、ピアイルクさんはハワイの航海師を育成していますし、ルッパンさんはサタワルの航海師を育てました。この2人が失われてしまったオセアニアの伝統航海術を復活させ、伝統カヌーによる航海の世界的な高まりをもたらし、現在に至っているということがいえるかと思います。



それでは、ルッパンさんによるチェチェメニワの沖縄への航海を紹介しましょう。寒い寒い冬に禪姿で航海する乗組員はかわいそうでした。1975年10月末にサタワルを出て、サイパンで3週間の風待ちのあと12月に沖縄へ着きます。この時期、サタワルの航海者は北へ向かって航海しないんですけれども、沖縄の海洋博に参加するという意気込みで海に出ました。ルッパンさんが航海の指揮をしている写真です。これは門田さんから借用しております。

ルッパンさんは、航海中は厳しい顔つきですが、素顔はやさしい方です。沖縄へ来たときは50歳です。写真のように島にいるときは、カヌーを解体して、パンノキの樹液で船体と舷側版を接着し、ココヤシの紐でつなぎ合わせるなどの修復作業をしています。航海師というのは、ほかの島から来た人、あるいは他人に対して常にやさしく、自分のものも相手のものも一緒なんだと考えています。ですから、私を招待し、ありったけのごちそうを出してくれました。これが航海者としてのたしなみ。他人を暖かく受け入れる。そういう寛容な気持ちがないと航海師にはなれないそうです。

復活したポの儀礼(1997年)



撮影:小松和彦

これが先ほど述べました航海修得術儀礼「ポ」の写真です。1997年にエペイマイさんが主宰しました。その時の様子ですが、パンダナスのゴザの上に小石が円形に並んでいます。石は星・星座です。真中にカヌーを置きます。そうすると、カヌーの船首が北極星の方向を向いた場合、船尾はどこを向いているか。これは簡単ですよね。「みなみじゅうじ座」です。じゃあ、そのときに右側の腕木の方向、真東に出る星は何か。これは彦星、アルタイル。じゃあ、左は何か。アルタイルが沈む位置。32方位の対となる4点と星座コンパス上の星の名前を子どものときから徹底的に教えこまれます。この星座コンパスというのは、今言いました真東をさす彦星の水平線に出現する方位は、私たちが使う磁気コンパスとは11度もずれています。この星座コンパスは、一つの日安となる方位と洋上の位置を割り出すための大事な知識です。そのほかに、航海師は、海面、気象、天文、魚や鳥などの生物、漂流物など、航海中に目に入る多くの現象を瞬時に把握してカヌーの針路を決めます。このレベルの航海の実践は、50～60歳になった航海術師にできることです。

タヒチへ向かうホクレア号 (1976年5月~6月)



Finney B. R 1979

J.クックが見た ハワイのカヌー (18世紀末)



Kane, H.K. 1976

この写真はタヒチに向かうホクレア号です。ホクレア号の製作にかかわった、ハワイ大学のベン・フィンニー博士が撮影した写真です。キャプテン・クックがハワイへ到達した 1776 年に、随行していた画家のホッジスはハワイのダブル・カヌーの絵を描いています。その絵に基づいてハーブ・カネさんもハワイのカヌーの絵を描いています。彼の絵には、ダブル・カヌーの甲板に犬も豚も鶏も、そして約 60 名の家族と思われる人々が乗っています。これがタヒチからハワイへ人々が移住して住みつき、現在のハワイ人の歴史をつくった初期の時代の人々といえます。最初は新天地で生活するためのあらゆるものを携えた航海だっただろうと、その想定のもとに描いたものです。

タヒチで大歓迎のホクレア号 (1976年6月)



Finney B. R 1979

ホクレア号がピアイルクさんの指揮でパペーテへ着きます。約 14 万人のタヒチの人口のうち、先住民のタヒチ人 1 万 5,000 人が、「おれたちの仲間たちがハワイからやってきた」と、ホクレア号を迎えてくれました。これがパペーテのバタバア湾での大歓迎の風景です。ホクレア号の後ろに浮かんでいるのが、今海洋文化館に展示しているカヌーと同種のタヒチのダブル・カヌーです。

ポリネシアの航海術 を蘇らせた マウ・ピアイルク



(Finney B. R 1979)



カヌー建造の名大工

© 2004/10/10

この写真の男がマウ・ピアイルクさんです。1976 年 6 月、タヒチに着いたときの写真で、当時 46 歳でした。サタワルでは、航海術師イコール名船大工です。彼はチェチェメ二号サイズのカヌーを何艘も建造しています。そういう船大工の技能も持っています。

マウというのはベッコウガメのことです。強いんです、背中が。お酒も私がウォッカをあげますと一人でカッと飲んでしまいます。それでもシャキッとしています。これが航海術師。酒に強いからマウじゃなくて、航海術だけでなくあらゆる知識があるからです。踏まれても踏まれてもベッコウガメは平気だということで、ピアイルクさんはマウ、マウとよばれております。

チェチェメ二号の雄姿



IV. チェチェメ二号とみんぱく

チェチェメ二号は海洋博の閉幕後、会場の波止場にぼつんと置かれていましたが、私たち国立民族学博物館(民博)が収集しました。1977年の開館以降、民博のオセアニア展示場の目玉として今も勇姿を見せてくれています。海洋文化館にあるポロワットのカヌーと比べると、サタワルのカヌーのほうがしなやかで美しいなんて言ってしまうのですが、船首・船尾の曲線がなだらかです。ポロワットのカヌーは非常に鋭い角度で波にあたります。島によってカヌーのなりもかなり違います。

海拔5メートルのサタワル島 (1979年)



サタワルは、海拔5メートル、面積1平方キロの、この公園と同じぐらいしかない小さな島です。現在でも、チェチェメニサイズのカヌーが8艘はあります。8つの母系一族が1艘は持っていますから。私が6カ月のカヌーの航海術の陸上特訓後、100キロ離れた隣の島へ行ったときに、帆綱を握らせてもらいました。帆綱一本でカヌーの転覆を防いだり、多くの風を帆にはらませたり、航海師は夜も寝ずに帆綱を握りつづけます。帆綱の握りで航海師の技術が問われます。

IV. チェチェメ二号とみんぱく

1. オセアニア展示の「海の世界」の目玉

・ミクロネシアの大型カヌーの世界初の博物館展示

2. チェチェメニの故郷サタワルで伝統的航海術と海洋文化の調査研究

・1978年～80年、民博研究者によるフィールドワーク

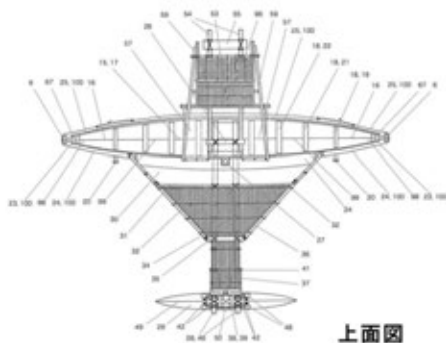
3. 島嶼間交通に近代的な船舶輸送と古来のカヌーによる輸送手段の共用

・自らの知識・技術による島環境への適応と持続性

ラモトレク環礁への航海 (1979年)



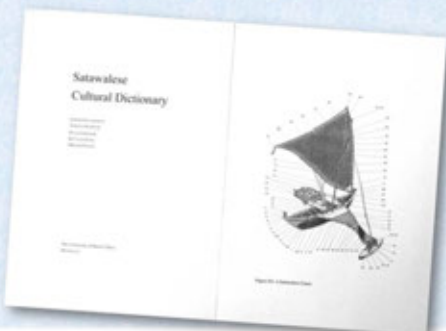
上面図と部位名称



『事典』作成作業(1981年)



『サタワル文化事典』の刊行へ



私はこういう大型帆走カヌーの平面図や側面図を作成して、サタワルの人たちに返しています。しかし、船大工は頭に設計図を入れていますが、こんなものを送ると害になるかなと思っています。とにかく、私たちはサタワルの人々に『サタワル語辞典』というか、言語だけではなくて、カヌーや航海術や占いなどいろいろな論文も盛り込んだ『文化事典』をつくって送ることにしています。

ここで私のサタワル島での初航海の体験について紹介します。

1979年10月に初航海の機会に恵まれました。西隣100キロにあるラモトレク島へ病人見舞いに行くカヌーへ便乗。航海師は信望の厚い若者で9名の乗員。朝9時に島を離れるが海面は鏡のよう。じりじりと照りつける太陽のもとで、年配の男が「風よ来い。風よ来い。」と風車に呪文を唱えるが、そよ風が吹くのみ。夕方にサタワル島が視界から消えたが、わずか16キロ進んだだけ。

タロイモと魚の夕食を終えた日没後、北東の風をうけてスピードが出る。右手の水平線近くの北極星と左手の中空に輝く「みなみじゅうじ座」から針路を割り出して進む。航海師が中間点に来たと告げた11時ころ、前方に雲が湧きあがり、あっという間に全天を覆いました。月も星もない世界は、「この世の終わり」という絶望感をいだかせます。

熱帯とはいえ風雨で身体は冷えて震えます。ますます、不安がつのり、悶々。

とその時、救いの知恵が叫びました。「カヌーは木製、沈むことはない」「私は泳ぎに自信がある」「この海には獰猛なサメはいない」。よって、カヌーにしがみついて嵐をやり過ごせばよい。危機的状況下でこの単純明快な声が私の恐怖心を一掃し、平常心で航海することができました。

航海師は2時間ほどカヌーを流してから帆を上げました。せまい横木の上でまどろみ、日の出とともに6時半ころに目を覚ますと、前方に平らなラモトレクの島影が目に入ってきました。このほろ苦い経験でカヌー航海に病みつきになりました。

V. おわりに

沖縄国際海洋博覧会の海洋文化館というのは、1975年の段階で海に暮らすオセアニアの人々の生の生活と失われた伝統文化を、多くの貴重な民族資料を収集して展示することによって、国内外の人々に教えてくれた点で大きな社会・文化的な影響を与えました。

一つには、太平洋の島々から消滅していた海の乗り物、カヌーや筏を海洋文化館に展示するために「昔のまま」で学術的に復元したことです。これは、オセアニアの人々に伝統カヌーの復元ブーム、カヌー・ルネッサンスをもたらす動機になったといえましょう。

二つめは、太平洋の伝統航海術が、ミクロネシアのサタワル島から沖縄の海洋博会場へと航海をしたサタワルの航海術師の偉業によって復活する動きを強めたことです。その航海術師、ルッパンさんの航海に負けずと、サタワルのもう一人の航海術師、ピアイルクさんはハワイで数百年ぶりの大航海を復活させ、ハワイとポリネシアの航海術の復興に火をつけました。そのことから、太平洋の伝統的カヌーと航海術の復興の発信基地がこの海洋文化館であったといえましょう。つまり、海洋文化館は、太平洋だけでなく世界の人々に20世紀後半の海洋文化と失われた伝統文化を復興することの意味とその重要性を伝える大きな役割を果たしたといえます。

おわりに

- 1. 海洋文化館は、海に暮らすオセアニアの人びとの生活、島嶼間航海と儀礼的世界や世界観を展示したユニークな世界第一級の博物館**
- 2. 海洋文化館の創設は、オセアニアの人びとの失われた大型カヌーの復元と伝統航海術の復活を可能にし、祖先が成し遂げた移住のルーツとルートを実験航海によって実証した。
つまり、今から3300年前に始まる太平洋を越えたグレートジャーニーへの誇りと豊かな海洋文化を今によみがえらせ、オセアニアの人びと自身の文化アイデンティティを活性化する文化復興の大きなうねりを生み出したといえよう。**
- 3. 海洋博覧会・海洋文化館の創設は、当時困難であった若手文化人類学徒の海外フィールドワークを可能にし、各自の調査研究を深める、人材養成の場でもあった。**

最後に、海洋文化館は、太平洋の島嶼間の航海と儀礼的世界や世界観を展示したユニークな文化施設で、現在でも世界第一級の博物館であること、そしてオセアニアの現在のカーヌーによる航海を隆盛させる大きなプロモーションとなったということを強調できます。もう一つ、この海洋文化館ができたころ、私はまだ 28 歳でした。海洋文化館は、私のような若者を研究者として育ててくれた、若手人材養成の場であったということをつけ加えておきます。

以上で私の発表を終わります。どうもありがとうございました。

